

Jay M. Smith, *Nobility Reimagined; The Patriotic Nation in Eighteenth-Century France*

Ithaca and London, Cornell University Press, 2005, xiii + 307pp.

森 村 敏 己 (一橋大学)

著者は18世紀フランスにおける祖国愛に関する議論を名誉心、徳、平等といった概念との関係に焦点を当てながら丹念に分析し、革命前夜の貴族イメージの急激な悪化を幅広い展望のもとに位置づけようとする。本書で論じられる著述家はモンテスキュー、ルソー、ミラボー、ネッケルなどの著名な思想家からパンフレット作者に至るまで多岐にわたるが、いずれの場合も近代フランス社会における貴族の役割が一貫した検討課題となっている。

絶対王政の進展に伴う貴族の地位低下、その道徳的墮落への批判と対応策は18世紀初頭から明確になるとされ、ブーランヴィリエやフェヌロンがまず検討対象となるが、著者が18世紀の祖国愛議論の枠組を定めた作品としてとくに注目するのは『法の精神』である。古代共和政の徳、つまり市民間の平等に支えられた祖国愛を高く評価していたモンテスキューだが、周知のように彼は近代の君主政にこうした徳を求めようとはしなかった。それどころか君主政の原理は徳ではなく名誉心だとすることで、徳を必要としない政体として君主政を位置づけたのである。名誉心はある種の偏見であり、利己的欲望だが、それが結果としては君主政の繁栄を支えるだけでなく、

専制への防壁となる。そして、もっとも強く名誉心を体現する存在はいうまでもなく貴族であった。

名誉心と徳をはっきりと区別し、君主政は徳を必要としないという議論は、貴族の役割への関心を高めると同時に多くの批判を生み、諸概念の関係の組み替えを促したという。その後の議論は名誉心と徳とを結びつけ、フランスの祖国愛の再生は名誉心というフランスに固有な徳の形態を基盤として実現されるとする方向に進む。問題はそのための方法としてふたつの対立する路線が存在したことである。いずれも名誉心をフランス人の国民的性格として捉え、その再生と強化を目指す点では共通するが、一方にはその伝統的な名誉心の強さゆえに貴族が国民の道徳的模範としての役割を担うとする見解があり、もう一方には市民の平等こそが名誉の獲得に向けた自由で公正な競争を保障し、名誉心の国民的な覚醒を実現する鍵だと考える立場がある。こうした路線対立は『法の世界』の出版以後すぐに確認することができるが、それがより鮮明になるのは七年戦争後である。七年戦争の敗北は名誉心を基盤とした祖国愛の再建を急務とする論調を高め、その方法をめぐる議論を活性化することになる。

祖国愛再建をめぐる路線対立という視点は魅力的である。商人貴族論争やイエズス会追放後の教育論争、セギュールの規則に代表される軍の改革や「貴族的反動」も、せめぎ合うふたつの路線との関係で解釈されることで、一貫した問題関心のもとに整理される。しかし、とりわけ著者の視点が有効に機能しているのは革命前夜の政治危機の際に噴出した議論の位置づけに関してだろう。それまでは「大臣の専制」への対抗という点で一致していた祖国愛論者たちは、市民の平等を重視する者も含めて法的な身分としての貴族の廃止を要求することはなかった。著者によれば高等法院を筆頭とする貴族層の「大臣の専制」への抵抗が、貴族の役割についての幻想を維持し、路線対立を覆い隠していたのだという。だが、来るべき三部会の構成は1614年の形式を踏襲すべきとした高等法院とそれに追隨した名士会の決定はこの幻想を打ち砕いてしまった。この後、貴族批判は一挙に急進化するが、著者はここで、高等法院が利己的な階級的利害を露わにし、階級対立を顕在化させたというマルクス主義的解釈だけでなく、それまで身分間対立はなかったと強調する余り、この急激な変化を特殊な状況の産物つまり事件の積み重ねが偶発的に生み出したものとしてしか説明できない修正主義も批判する。1788年9月以降に高まる激しい貴族批判は、ふたつの路線がいまや調停不可能なものとして認識されたことを示している。高等法院の決定が重要な契機となったのは確かだが、その含意がどのような文脈で理解されたのか、なぜ大きな反響を呼び起こしたのかは、世紀半ばから続く祖国愛議論に潜んでいた路線対立を考慮することではじめて十分に理解できるという。

18世紀後半に関する社会史的な分析に比べて、革命前夜に始まる急激な変化の説明については説得力を欠くように見える修正主義的解釈への批判として、著者の議論は十分な有効性を持つように思われる。また、ひとつの身分としての一体性を喪失した多様な貴族という近年の解釈は、なぜ貴族は一体だとするフィクショナルな言説が続いていたのかを十分に説明できないが、名誉心に基づく祖国愛の高揚というフランス独自の展望の中で、革命前夜に一挙に優勢となる市民の平等論と並んで、貴族は固有の役割を担うとする見解が有力な流れを形成していたとする著者の主張は、貴族の一体性を強調する言説が必要とされた背景を理解することにも貢献している。